大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。

第9回

語彙を「生きた知識」にする映画「熟見」法のススメ①



語彙サイズは重要か

英語でアウトプットするためには語彙が大事だということはこれまでたびたび書いてきた。リスニングにおいても、聞き取れない英語のテキストをひたすら繰り返して聴くより、語彙を増やしたほうがよいと書いてきた。それは間違いない。

語彙が大事と言うと、多くの読者は語彙のサイズを大きくすることが大事だと思うはずだ。実際、英語を外国語として学習する学習者の語彙サイズを計るテストというのがある。5,000語レベルの語彙を持つ人は大きな語彙サイズを持ち、かなり「英語ができる人」と一般的には判断される。ちなみに、「5,000語レベル」の判定をもらうためには、使用頻度の低い抽象的な語や専門的な単語も知っていなければならない。

しかし、使用頻度の低い語や専門的な単語をたくさん「知っている」5,000語レベルの人が、英語を母語とする5歳児よりも自由にアウトプットができるかというと、そうとは限らない。5歳児は、低頻度の抽象的な語は知らないが、見事に自分の話したいことを話すことができる。

9月号のこのページで、「生きた知識」について述べた。状況に応じて自由に使いこなすことができる知識は「生きた知識」、ただ持っているだけで自在に使うことができない知識を「死んだ知識」と言う。5,000語の単語も、それで自在に英文を作ってアウトプットができなければ「死んだ知識」になってしまう。反対に、英語ネイティブの幼児の語彙は、単語数は少なくても確実に「生きた知識」になっている。

語彙が「生きた知識」となるためには

ある情報が「生きた知識」となるためには大事なことが2つある。第一に、その情報が深く処理されること。第二に、すでに持っている知識と関係づけられ、つながることである。英語でアウトプットするためには語彙を持つ必要があるが、語彙の中の各単語が「生きた知識」でなければならない。そのために必要な条件を挙げよう。

1．単語の使い方が文法とリンクしている。例えば、名詞なら可算名詞か不可算名詞なのか、動詞ならどのような構文で使われるのかが分かり、文法的に適切な形で使うことができる。

2．単語のコロケーションが分かる。コロケーションとは、その単語と一緒に使われる他の言葉である。例えば、動詞なら主語や目的語になる名詞や、前置詞。形

1812_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 82-83 2018/10/19 11:35

容詞なら名詞がコロケーションとして大事である。

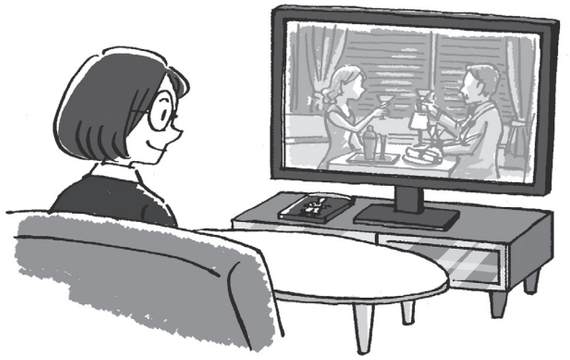
3．単語がどのような文脈で使われるのかが分かる。例えば、非常にフォーマルな状況、あるいはくだけた状況でしか使われない言葉なのか、普通の状況で汎用（はんよう）的に使われるのか、など。

4．類似の意味を持った他の単語と意味がどう違うのか。これは、上記2、3と深く関係する。意味の違いは、コロケーションの違いや、社会的な丁寧さ、ニュアンスなどに現れることが多いからである。類義語をたくさん知り、それぞれの意味や使い方の違いが分かってくると、自分の書きたい状況に合わせて的確に単語を選択でき、正式な依頼をするときにスラングに近い単語を使って場違いな英文を書いたり、意味はだいたい分かるのにネイティブには不自然で「残念な」表現をしてしまったりすることが少なくなる。

単語だけを取り出して、それに対応する日本語を覚えるというのは最悪の学習法で、これでは「生きた知識」を生まないことは、すでに繰り返し述べてきた。8月号で、コーパス（注：英語のテキストを大量に集めてデータベース化したもの。検索エンジンもあり、いろいろな分析ができる）を使うことをお勧めした。しかし、すべての単語を調べるのは時間がかかりすぎるし、どの単語をコーパスで深掘りしたらよいのかというカンも働かないかもしれない。そこでお勧めしたいのが、自分の好きな映画を「熟読」ならぬ「熟見」し、そこで気になった単語をコーパスで検索する方法である。

映画を「熟見」してみよう

映画を英語学習に使うというのは、特に新しい方法ではない。ただ、映画を使った学習法も、認知的にはあまり学習が深まらないやり方で行われていることが多いように思う。例えば、多くの学習者は、とにかくたくさんの作品を見るのがよいとか、字幕なしでがんばって見るのがよいなどと思っているのではないだろうか。10月号で述べた多読の効用とも関連するが、おおまかにセリフの意味を取る目的なら、たくさんの作品を字幕なしで見る方法も悪くはない。映画には視覚情報のほか、セリフ、音楽、効果音などの聴覚情報、ストーリーの流れの中での文脈情報など、非常にリッチな情報が含まれているからだ。リッチな情報があればスキーマを想起しやすいので、英語のセリフがそれほど正確に聞き取れなくても、状況が何となく分かる。映画は画像なしのテキストやリスニング教材よりもおおまかな意味がつかみやすいので、文字を読むだけでは苦痛な人や、音声だけではすぐについていけなくなってしまう人にもお勧めである。



しかし、大ざっぱに意味を取ろうとするときの情報処理のしかたでは、語彙を増やすことにはつながらない。内容をおおまかにつかもうとするとき、人は細かい言い回しには注意を向けないからである。そこで、私は別の方法で、映画を自分の英語力向上に役立てている。お気に入りの映画のセリフを一言一言正確に聞き取れるようになるまで何度も見るのである。これはなかなか大変である。教材CDはほぼすべての単語をはっきりと発音しているが、映画では前後の単語がくっついていたり、機能語（代名詞、前置詞、be動詞、冠詞）などが非常に弱く発音されたりするので、耳を澄まして聴いても音として聞こえないことも多い。例えば、前回も取り上げた007シリーズ『スペクター』の中の一節“Do you understand what I mean?”に対する答え“I think I do.”などは、こんなに簡単な文なのに、文全体が1つの音になってしまっていて、全く聞き取れなかった。映画のセリフを1語1語理解するということは、話者が心の中で発話した英文を、聞こえなかった単語も含め、自分で行間を埋めて復元する作業なのである。

1812_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 84-85 2018/10/19 11:35



これはリアルな会話を聞き取るにも非常に役に立つことである。もちろん、リアルな会話ではそういうことがしょっちゅうあり、常にこの推論作業をしなければならないので、実践に向けたよい練習になる。

字幕なしで、実際にはほとんど音になっていない発話も含め、すべてのセリフを復元するのは、ネイティブ並みの英語力が必要だ。一度聞いただけですべてのセリフを復元できる人はこのような練習をする必要はないだろう。前回にも述べたように、予測ができない単語は、自分の「知っている」基本単語であっても聞こえない(＝単語が認識できない)ことが多く、字幕なしでは、何回見ても聞き取れないままになってしまうことがほとんどである。

効果的な「熟見」の手順

そこで次のような方法をお勧めする。まず、字幕なしでその映画を通しで見る。その映画が字幕なしでもほぼ理解できるレベルで、何度見てもよいと思えるほど気に入った内容であれば、今度は全部のセリフの聞き取り理解を目指して繰り返し見る。これが熟読ならぬ「熟見」である。

「熟見」するとき、まずは日本語字幕つきで何度か見ることから始める。その際、聞き取れなかった部分を覚えておき、その部分をあとから繰り返し見る。それでもどうしても聞き取れない単語やフレーズがあったら、そこで初めて英語の字幕に切り替える。映画(日本仕様の映画DVDのほとんど)の利点は、日本語と英語の両方の字幕があることである。

この方法を映画『007スペクター』で試してみた。もともと飛行機の中で暇つぶしに見始めた作品だが、ぼんやり見ているうちに、英語が非常に分かりやすいことに気づいた。分かりやすいのは、登場人物がゆっくりはっきり話すからではない。話し方が端的で、セリフが短く、一切の無駄がないからである。たまにイギリス独特のウイットを感じさせるセリフがあり、それはそれで「こういう言い方をするのか」と興味深いのだが、全般的には、世界中の聴衆を意識して作ってあるせいか、イギリス独特の言い回しやスラングもほとんどなく、特定の階層の慣習についてのスキーマがないと理解できないようなこともない。何より感心したのは、難しい単語や複雑な構文を使ったセリフ回しがほとんどなく、ストーリーがテンポよく展開することである。『007スペクター』の脚本家はものすごい言語力とセンスを持っていると確信した。

効果1——認知の負荷が減る

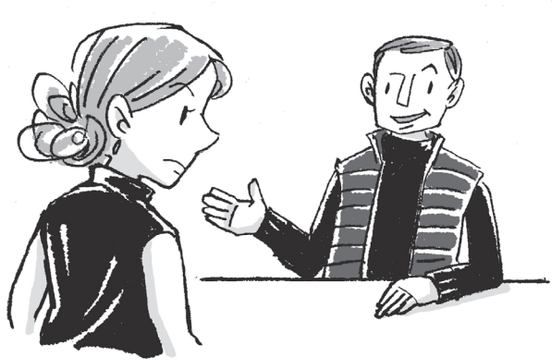
それはともあれ、この方法のどこがよいのか。最初は字幕なしでチャレンジし、そのあと英語の字幕を見たらよいではないか、と思う読者もいると思う。しかし、日本語字幕をつけて見るには認知的にきちんと理由がある。まず、日本語の字幕で内容を把握しておくと、意味を理解しようとする認知の負荷が減る。すると、軽減された情報処理のスペースを、各単語を正確に聞き取る作業に振り向けることができる。セリフを意味のレベルで大ざっぱに理解するという作業から、1語1語を丁寧に聞き取るという別のレベルの認知処理に切り替えやすくなるのである。

効果2——予測がしやすくなる

次に、予測がしやすくなる。日本語の翻訳を見ることによって、次に何を言うかを予測しながら英語を聴くことができる。予測すること自体、深い情報処理を必要とするので、聞き取った単語や文が記憶に残りやすくなるのである。日本語字幕で聞き取れるところまでがんばり、最後に英語字幕を見ると、たいていびっくりする。日本語字幕を見ながら認識できないセリフは、予測ができなかった単語や言い回しが含まれていることがほとんどである。このように、人は予測が裏切られたとき、最も深い情報処理をして、記憶に深く刻印される。

11月号でも述べたが、『007スペ

1812_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 86-87 2018/10/19 11:35



クター』主題歌の日本語字幕「落ちる僕を支えてくれるかい」の英語が“Could you ○ my fall”と○の部分が全く予測できず、英語字幕を見て○がbreakだと知ってびっくりしたことがある。この衝撃ゆえに、このbreakの意味と使い方は一生忘れないと思う。このように心に強く刻印された箇所はほかにもいくつかあった。

この映画のヒロインとなる美しい女医にジェームズ・ボンドが最初に出会うシーンでは、ボンドが患者として会いに行き、彼女がボンドに問診をする。彼女がボンドの成育歴、家庭環境などを尋ねる場面がある。そのとき、ボンドがいきなり“Humor me.”と言って、逆に彼女の経歴を尋ねる。字幕では「質問が…」となっていた。この状況でhumorという単語は全く予測できなかったので聞き取ることができず、最後に英語の字幕を見てこの表現を知り、驚いた。humorという単語は「ユーモア」という名詞としてはもちろん知っていたが、動詞の使い方は知らなかった。ちなみにCambridge Online Dictionaryでは、語義を“to agree to someone’s wishes in order to help improve that person’s mood or to avoid upsetting him or her”（〈人と〉調子を合わせたり、〈人の〉機嫌を損ねないようにしたりすること）と記載していた。映画の中では「あなたのことを教えてください、そのことによって、私を満足させてください」のような意味合いなのだと思う。自分で使うには上級すぎる用法かもしれないが、ずっと忘れないだろう。

それに対して、最初から英語字幕を見た場合には、このような深い認知の処理過程は起こらない。ふんふんと納得してしまい、予測をしなくなる。すると情報処理は浅くなり、記憶に残らない。人の性（さが）として、はじめに正解を見てしまうと、「そうだよね、そう思ってた」とまるで最初から正解を知っていたかのような気がしてしまい、正解に対して驚くこともないのである。

来月号は、英語スキーマを習得し、日本語力までアップさせるための映画「熟見」法についてさらに掘り下げる。

次号予告

第10回　語彙を「生きた知識」にする映画「熟見」法のススメ②

1812_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 88-89　2018/10/19 11:35